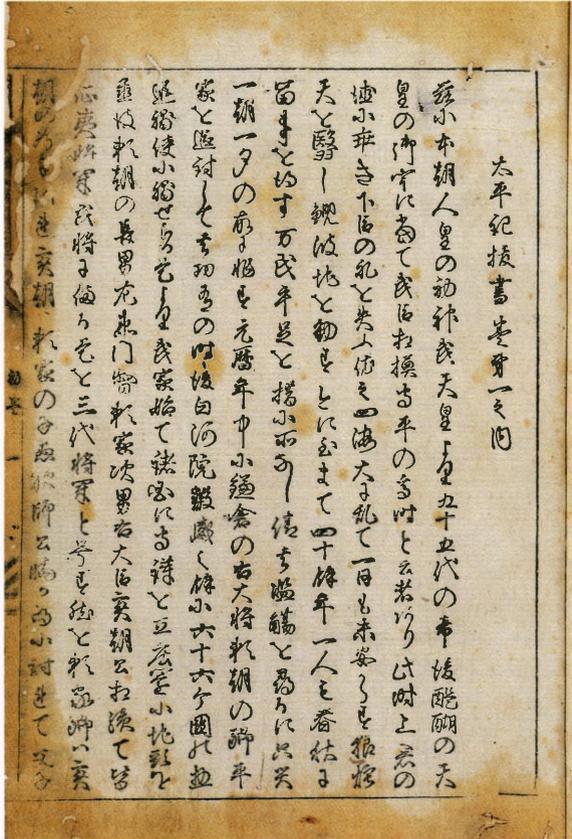


# やまとの名品 天理図書館



たいへい きぬきがき  
**太平記抜書 (重要文化財)**

慶長期刊 6巻6冊  
 縦26cm 横19.5cm

『太平記』は南北朝にまつわる五十年の動乱を描いた軍記物語で、その書名は太平の世の到来を願いつけられたと言われている。

掲出書はキリシタン版『太平記抜書』。四十巻を六巻六冊に編集したもので、キリスト教的立場から仏教や神道等に関する箇所を意識的に省略するなど、独自のキリシタン文学と言える側面がある。出版地は長崎と推定される金属活字版で、出版年は近年再発見された資料により、通説より早い一六一一年以前の可能性が指摘されている。

キリシタン版は一五九一年から禁教令までの二十数年間に、キリスト教布教のため、日本イ

エズス会の宣教師達により出版された書物で、教義書・語学書・文学書等がある。その中で本書は外国人宣教師等が日本の言葉と歴史を学ぶ教科書として出版された。

『太平記』は儒教的思想や、仏教の因果応報を取り入れて語られている。これらの思想は日本文化の根底にあるものとして、彼らは布教活動の当初よりその理解に努めていた。当時流行していた『太平記』は、格調高い多彩な表現と用語で当時の世相や思想、様々な人間像を豊かに描き出しており、正に学ぶべき



本書より発見されたキリシタン版  
『落葉集』断簡(重要文化財)

最高の日本語を有した歴史書としてキリシタン版の一書に選ばれたのである。

昭和四年旧蔵者のもとで本書

の改装修理が行われた際、表紙裏打ちとして使われていたキリシタン版『落葉集』断簡十二葉が発見され、重複して綴じられていた『太平記抜書』二葉が取り出された。その後時が流れ、これらゆかりの三点は奇しくも別々に当館の所蔵となり、キリシタン文化の一端を今に伝えている。

(天理図書館 多田裕子)